

主 題：アレフ：神のことばと幸福」
 聖書箇所：詩篇 119 篇 1－8 節

海拔 8,848 メートル、世界で最も高い山の頂がそこにあります。この世界一高い山、エベレストを制覇すること、それはすべての登山家たちの夢かも知れません。多くの登山家たちは山頂に立とうとしてこの山に登る挑戦をして来ました。多くの人たちはその途中でいのちを落とし、それよりもさらに多くの人たちはその途上で断念しました。その行程が余りにも厳しく険しいものだったからです。毎年、登頂者の数は確かに増えますが、このエベレストの山頂に立ってそこに名前を刻んだ人物は、人間の歴史の中でそれ程多くはありません。海底 11.03 キロ、これがマリアナ海溝といわれるこの地球で最も深い深海がある場所です。ひょっとすると、このマリアナ海溝という場所は、この地上において最も知られていないそこに何があるのか分かっていない場所かも知れません。まだだれも、この 11.03 キロ地点には到達していません。唯一、二人の人物だけが、1960 年 1 月 23 日に深海潜水艇「トリエステ」でその近くまで到達しました。その距離は 10,911 メートルだったと言われています。深さ、高さ、そこには多くの神秘があります。そこには私たちが想像することができない、想像することが困難な光景が広がっています。

けれども、エベレストの山頂よりも、マリアナ海溝の海底よりも、さらに高くさらに深く、さらに不思議で想像も及ばないものが私たちの目の前に置かれています。パウロはそのことについて、このようなことばをもって私たちに説明してくれます。ローマ 11:33「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」と。私たちは神の知恵と知識を想像し始めることすらできません。神が備えられている道は私たちには理解することが不可能なものです。だから、神は私たちにこのみことばをお与えになったのです。私たちにこの聖書を与えてくださることによって、私たちは神の知恵とその知識がどのようなものなのか、神のさばき、神の備えられている道がどのようなものなのかを、このみことばを通して見て取ることが出来ます。そのために神は私たちにこのみことばをお与えになったのです。それゆえに、丁度、登山家たちがいつの日かエベレストの頂上に立ちたいと心から願うのと同じように、私と皆さん、そして、あらゆる神の聖徒たちはこのみことばをしっかりと理解して、神のすばらしさを心から味わいたいと心から願っているのです。

聖書の中には確かに浅瀬と言えるところがあります。私たちが読んで、比較的簡単に単純にそのみことばに書かれている真理を理解できる箇所があります。同時に、聖書の中には深海があります。これまでの歴史の中で、最も偉大だと言われてきた神学者たちに理解をすることが非常に困難だと言わしめるような真理が、このみことばの中にはたくさん記されています。聖書はまさに、この地球にある高々とそびえる山脈や、深く広がる海溝と同じように、神の栄光の高さ、深さを私たちに知らしめてくれます。このような高さ、深さのある聖書の中でも、聖書という山脈の中にあって最も高々とそびえ立つエベレストがあると多くの注解者たちに言われるのが、今日皆さんといっしょに見て行こうとする詩篇 119 篇です。人々はこの詩篇を「詩篇のエベレスト」と言います。それは単にこの詩篇が私たちの理解において非常に難しいものであるからという訳ではありません。また、ただ単に、この詩篇が余りにも長いからエベレストと呼ばれる訳でもありません。この詩篇がエベレストと呼ばれるのは、この詩篇の中にみことばの重要性和みことばのすばらしさが、他に類のない形で記されているからです。この詩篇が単に詩的に美しいからそう呼ばれるのではなく、この詩篇は神の栄光の美しさを私たちに圧倒的な形で教えてくれるゆえに、この詩篇はエベレストと呼ばれるのです。

そして、それゆえに、みことばを学ぶ者たちはこの詩篇に惹かれます。この詩篇は、真剣にみことばを学んで行こうとする人たちにとって、まるで磁石のように私たちの心を引きつけるのです。この詩篇の中に書かれていること、その事柄を私たちがさっと見て行くな、そこに書かれてあることは、ひょっとすると同じ事柄の繰り返しのように見えるかも知れませんが、それ程真実から遠く離れた見方はありません。この詩篇はまるで底のない井戸のようなもので、そこからは溢れんばかりに神の真理が流れ出るのです。偉大な説教者の一人ス波尔ジョンは、この詩篇の注解の序文の部分にこのようなことばを記しています。「だれかがこの詩篇を学べば学ぶほどこの詩篇は新鮮なものになる。それはちょうど、旱魃を体験した後に流れるナイル川のほとりに私たちが行くようなものだ。この詩篇は私たちがそこに訪れるほどにその内容が豊かになり、そこには新しい発見と驚きが満ちあふれている。この詩篇の中に

は一つとして無駄なことばが記されていない。そこに記されている真実は新しい御国のすばらしいぶどう酒の香りで満ちあふれている。」と。

すばらしい詩篇、偉大な詩篇、詩篇の中のエベレスト、私はこれからどれ位この詩篇のエベレストのその高さを登り切ろうとするのかよく分かりません。どれ位の深さまで皆さんといっしょに潜って行くのか、決めかねる部分がたくさんあるのですが、少なくとも、皆さんといっしょに、今日と来週、この詩篇の冒頭部分を見て行きたいと思います。そして、皆さんにこの詩篇が、いや神のみことばが、神のすばらしさがどのようなものなのかを味見していただいて、皆さんがこの詩篇を自分の目で学び、自分の舌で味わい、神がいかにすばらしい方であるのかを自分のものとして体験していただきたいのです。

今朝、皆さんとともに、この詩篇を理解する上で大切な幾つかのカギとなる事柄を考えた後、残りの時間と来週を使って、詩篇 119 篇 1－8 節までを見て行きます。来週の日曜日、このメッセージが終わったときに、私が何よりも願っていることは皆さんが確信することです。私たちの人生を歩んで行く上で、私たちにとって最も必要なものは神のみことばであり、私たちの心が喜びに満たされ、満足に満たされ、幸福な者となるために必要なものは、神が与えてくださるこのみことばだけであると、もし、私たちがそのことに少しでも気付くことができるならば、私たちはこのみことばを学ばずにはいられなくなります。願わくは、そのような思いをもってこの時間を皆さんと過ごすことが出来ればと思います。いつもなら、ここで詩篇 119 篇を読むのですが、それをするとならば、それだけで時間が終わります。非常に残念なのですが、1－8 節だけを読んで、この詩篇を理解する上での「カギ」を幾つか見ながら、この詩篇に入って行きたいと思います。詩篇 119：1－8

119:1 幸いなことよ。全き道を行く人々、主のみおしえによって歩む人々。

119:2 幸いなことよ。主のさとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々。

119:3 まことに、彼らは不正を行わず、主の道を歩む。

119:4 あなたは堅く守るべき戒めを仰せつけられた。

119:5 どうか、私の道を堅くしてください。あなたのおきてを守るように。

119:6 そうすれば、私はあなたすべての仰せを見ても恥じることがないでしょう。

119:7 あなたの義のさばきを学ぶとき、私は直ぐな心であなたに感謝します。

119:8 私は、あなたのおきてを守ります。どうか私を、見捨てないでください。

この詩篇を理解するに当たって、私たちはすべての登山家たちと同じように、準備をしなければいけません。山に登るためにはその山がどんな山なのか知らなければいけないし、山に上るために相応しい道具を持っていなければいけません。同じように、この詩篇 119 篇を読んで行くに当たって、それを正しく理解するために、私たちはよく調べなければいけないし、相応しい道具を持っていなければいけないのです。ですから、これからしばらくの時間、皆さんといっしょにまずその準備をしたいと思います。直接みことばに関係ないかも知れませんが、いつもとスタイルが違います。けれども、非常に重要な部分で、私たちが備えていなければいけないことだろうと思います。ですから、皆さんにはしばらく細かいことを話しますが、ぜひ、そのことを覚えて、これからこの詩篇を見るに当たっての道具を用いていただければと思います。

★詩篇 119：1－8

A. カギとなる事柄

1. 長い

この詩篇を見た時に、最初にまず皆さんが気付くことは「非常に長い」ということです。聖書通読をしていて、詩篇にまでたどり着いたとき、119 篇でびっくりします。これまで一日何章かずつ読んで来たけれど、これを読むのは大変だと思います。実際に、聖書の中でこの詩篇 119 篇は最も長い章です。二番目に長いのは、詩篇 78 篇で 72 節あります。でも、これは 119 篇の 176 節の半分にも達しません。驚くことに、この 119 篇の節数だけを考えると、聖書 66 巻ある中で、実に、この節数よりも少ない書が 30 巻あります。新約聖書の書簡はほとんどこの詩篇の 119 篇よりも短いです。

ここには全部で 176 節記されていますが、この 176 節を 22 個の部分に分けることができます。日本語の聖書を見てもそのことがはっきりしています。各区分には一行空いています。22 に区分することができるのですが、この 22 の区分一つ一つには 8 節ずつ記されています。つまり、8 節が一区分となって全部で 22 個あるのです。ですから、「この詩篇は何節ありますか？」と聞かれるなら、22 × 8 と計算をすればいいのです。そうすると 176 になります。

この詩篇を理解するに当たって、22 という数字は非常に重要な数字です。なぜなら、この詩篇は特別なヘブル語の詩的な表現、形を使って記されているからです。ヘブライ語のアルファベットは全部で

22文字あります。そして、この詩篇はその一部分毎に、最初に出て来る文字がヘブライ語のアルファベットに沿っているものです。例えば、このような詩的な表現を使う箇所はこの詩篇119篇だけではないのですが、一般的にこのような形の詩が書かれるときは、1節毎に最初の文字がアルファベットの最初の文字で始まるのです。ヘブライ語なら「アレフ」という文字が最初に出ます。「アレフ」が1節で、2節目は「ベ」で英語のBに相当する文字で始まるのです。3節目は「ギメル」です。そのように4, 5, 6節、そして、22節まで続きます。こうしてアルファベットすべてを網羅するのです。それがこの詩篇119篇の特徴です。日本語で言うなら、1節目がイ、2節目がロで、3節目がハで始まるというわけです。

このようなスタイルを見る時に、明らかに、そこにはこの著者が意図的にこれらのことばをその様な形に構成したと見て取ることができます。これは非常に難しいことだと思いませんか？詩的に美しく表現することができる様に、内容も考えた上で、アルファベットの順番に1節ごとに並べて行くのです。ところが、この詩篇の著者は、それを8節ずつまとめてそのようにするのです。聖書の中にはこのような特別な形を使って記した部分、箇所があるのですが、この詩篇119篇ほど長いものはありません。著者は8節ごとに最初に使う文字を一つずつ変えて行くのです。ヘブライ語でこの詩篇を見ると非常に美しいです。その始まり、その長さ、そのことばのリズム、そのような部分において著者は非常に巧みな技術を使って、すばらしい表現でこの詩を書いているのです。

8節ずつと言いましたが、この8という数字も、実は、この詩篇の中にあっては非常に重要なものです。なぜなら、この詩篇は皆さんご存じのように、神のみことばについて話をしています。著者は神のみことばを現わすために、八つの違うことばを使うのです。今ここでリストの全部を上げることはしませんが、この詩篇を通して八つのことばが「神のみことば」を表わして使われています。一つ一つの意味の違いが確かにあります。そのことはこの後見て行きますが、この八つのことばは最初の1-11節の間にすべて登場します。これら八つのことばは、トータルで、すべて合わせて、神のみことばがどのようなものなのかを教えてください。確かに、一つ一つに意味の違いがあるのですが、それらを強調しようとしているのではなく、この詩篇全体を見て明らかになることは、この著者はこれら八つの事柄をもって、神のみことばがどのようなものなのかを私たちに知らせようとしているのです。ちょうど、ダイヤモンドが磨かれて、幾つかの面にカットされると、とてもすばらしい輝きを放つと同じように、この詩篇の著者は、「神のことば」とひと言で言うところを、敢えて、その神のみことばに関して八つの面にきれいに整えて、それらすべてをもって、私たちに「神のことば」がいかにすばらしいものかを教えてください。 (以下、八つの「**神のみことばに関する基本的なことば**」は□で囲みます)

この八つのことば、神のみことばを表わす八つの単語は、詩篇119篇全体、176節ある全体の中の169節に使われています。少なくとも、169節には、必ず一つは八つのことばのうちのどれかが使われているのです。ものすごい数です。そうすることによって、この詩篇のテーマが何かを圧倒的な形で私たちに教えてくれるのです。この詩篇のテーマは「神のみことば」です。また、この詩篇の著者はこれら八つのことばをいろいろなところでいろいろな形で混ぜて使うのですが、ほぼ間違いなく、すべての場所で、著者は一つの節に1個、八つの中のどれかを使うように心がけています。先ほども言ったように、176節ある中の169節に使われているということは、八つのことばが全然使われていない箇所があるのです。また、この詩篇の中には何箇所かに二つ、または三つ、これらのことばが重ねられている所があります。それらが教えることは、その箇所は著者が非常に強調している部分だということです。私たちはそのことにしっかりと目を向けることが出来るようになっていなければいけません。

2. 神のみことば以上に「主」について語っている

また、確かにこの詩篇119篇は、「神のみことば」をテーマとし、それに非常に大きな注目をしていますが、私たちがこの詩篇の主題は「神のみことば」だけであると考えるのは間違いです。実際に、神のみことば以上に強調されていることがこの詩篇の中にはあるのです。それは「神ご自身」です。確かに、この詩篇を見た時に「主」と訳される「ヤーウェイ」というヘブル語の単語は24回しか登場しません。また、「神」というその単語は1回しか使われていないのです。けれども、私たちが神のみことばを表わす八つの単語を見て行くときに、ほとんど、すべての場所でこれら八つの表現には「あなたの…」ということばが加えられているのです。つまり、この詩篇の著者がこの詩篇の中で最も頻繁に語っていることは「神」なのです。「神の」ことばです。

著者は確かに、神のみことばをハイライトしています。みことばを主題としてこの詩篇を記しているのですが、著者はそのみことばを与えた神のことをいつも忘れていないのです。みことばを語るためにみことばについて記しているのではないのです。神について語りたいゆえに、その神が語ったことばを強調しているのです。私たちはそのことを絶対に忘れてはいけません。

3. 著者は多くの苦しみ、困難を経験している

そして最後に、私たちがこの詩篇を理解する上で、著者が多くの苦しみ、困難、戦い、そのような中でこの詩篇を書いていることを忘れてはいけません。この詩篇を見て行くと、176節のうち、実に、48節で彼が経験して来た、また、彼が現在経験している、様々な苦しみに関する告白が記されています。彼は苦しんでいたのです。この詩篇を書くに当たって、著者は王宮で椅子に腰掛けながら楽な格好で、思いつきでこの詩篇を書いたのではないのです。著者は苦しみの中で、苦しみを通して来て、現在もその様な困難の中にいる中で、神について考え思いを巡らして行く中で、どのようにして神のことを、神のみことばについて、最も覚えやすい形で、最も美しい形で神のすばらしさを無駄なく語ろうとして、考え抜いてこの詩篇を書き記したのです。

実際に、だれがこの詩篇の著者なのか私たちには分かりません。でも、このような苦しみ、このような詩的なスタイル、すばらしい知恵を見る時に、多くの注解者はこの詩篇はひょっとしたらエレミヤによって書かれたのではないかと言います。エレミヤは確かに大きな試練を経験しました。苦しみを経験しました。また、エレミヤの「哀歌」はアルファベットの順に書かれています。エレミヤ哀歌の1章、2章、そして、4章と5章はそれぞれ22節あります。なぜでしょう？1節ごとにアルファベットの1文字ずつで始まっているのです。3章は66節あります。3節ずつ、アルファベットの文字が変わって行くのです。その様な詩的なスタイルを彼自身が用いたことも含めて、著者はエレミヤだと言う人たちがたくさんいます。また、著者が経験している様々な事柄を考慮したときに、このようなすばらしいことを書くのは、また、みことばに対してこれ程の思いを持っているのはダニエルに違いないと言う人たちもたくさんいます。また、ある人たちは、このことばが使われている表現などを見た時に、この詩篇も多くの詩篇と同じように、ダビデによって書かれたのだらうと考える人たちがいます。

私たちにはだれが書いたのか分かりません。推測するのは自由ですし、想像を働かせることも良いかもしれません。でも、私たちに間違いなくはっきりと分かっていることは、この詩篇の著者は苦しみの中にあって、思いつきでこの詩篇を書いたのではなく、意図的に一つ一つのことばを選んでここに記しているということです。

B. 119:1-8

さあ、山に登る準備ができました。皆さんといっしょにまず一目を目指して上り始めて行きたいと思います。先ほども話したように、この詩篇は8節ごとの部分に分かれます。最初の8節のすべての節が「アレフ」というヘブライ語のアルファベットの最初の文字で始まって行くわけです。日本語の聖書では余りよく分かりませんが、この詩篇は2行単位で1節ずつに分かれて行きます。日本語では2行、あるいは、3行になっていますが、2行単位に流れています。

1. みことばと私たちの幸福との関係

この詩篇を見て行くに当たって、多くの注解者たちはこの詩篇の始まり方と詩篇1篇の始まり方の類似性に目を留めます。どちらも「幸いなことよ。」で始まります。ちょうど、詩篇1篇が詩篇全体の序文的な役割を果たしているのと同じように、詩篇119篇の最初の区分、「アレフ」の部分は、119篇全体の序文的な役割を果たしているのです。著者は2回、1節と2節の冒頭に「幸いなことよ。」ということばを使います。そして、ここで著者はそれを繰り返すことによって、真の幸福、満ちあふれた喜び、究極の満足とは、神のみことばに沿って生きている人たちによって経験されるものであることを教えているのです。

この「幸いなことよ。」ということばには「特権」という意味合いを見て取ることができます。この「幸いさ」は他の人が見て羨むような幸いなのです。周りの人たちが「ああ！なんとあの人はすばらしいのだろう！あの人はなぜあのように幸せなんだろう？どうしてあの人はいつも笑顔が絶えないのだろうか？なぜ、あのように満足しているのだろうか？」と言うのです。それがこの詩篇の著者がここで言わんとしている「幸いさ」です。つまり、このことばが言い表わそうとしていることは、単に、私たちが個人的に内側で感じている自分勝手な満足でも自分自身の中にある喜びでもないのです。ある意味では、自分のことはどうでもいいのです。もちろん、本当に幸せなときは自分でも喜んでいます。本当に嬉しいときには自分も心の中に喜びや満足を持っているのですが、自分自身のその体験のことではなく、周りの人たちがその姿を見て「何と幸いなことよ！」と言っているのです。特に、私たちがよく覚えておかなければいけないことは、これが詩篇の著者の口を通して、ペンを通して、神ご自身が「この人物は幸いだ」と言っていることです。そこに私たちは目を向けなければいけないのです。

1) 幸いな人とは？ — その特徴 1-2 a 節

神が「幸いだ」と言う人物とはいったいどのような人でしょう？その特徴が1節と2節に記されています。ここには大きく分けて三つの事柄が記されているのですが、このように分けることができます。

(1) 非の打ち所のない人、非難されることがない、完全な人 1 a 節

「幸いなことよ。全き道を行く人々、」と著者は言います。ここで「道」と訳されていることばは、日本語でもよく使う様に「人生の歩み、その行程」を指して使うことばです。どの道を行くのか、私たちがどんな生き方をして行くのか、その道筋のことです。そして、その「道」はここで「全き」ものであると説明が加えられているのです。この「全き、完全な、または、非難する所がない」という概念は、実は、神がご自身の民に常に要求されていることです。例えば、神はアブラムに対して「アブラムが九十九歳になったとき主はアブラムに現われ、こう仰せられた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。」（創世記 17 : 1））と言われましたが、同じことばが使われています。神がアブラムに要求したことは、あなたはわたしの前をしっかりと歩み、あなたが完全な者でありなさいということです。完全でありなさい、非難される所のない者でありなさいと。事実、神は、箴言 11 : 20を見ると「心の曲がった者は主に忌みきらわれる。しかしまっすぐに道を歩む者は主に喜ばれる。」とあるように、神の前に真っ直ぐにその道を歩み続ける者、完全にその道を歩み続ける者を喜ばれるのです。

皆さん、どのような人物がこのような歩みをして神に喜ばれたのかご存じですか？ヨブ記 1 章 1 節にはヨブに関して「この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。」と記されています。8 節では「主はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいないのだが。」とあります。ここで「潔白」と訳されていることばが「完全な非難される所のない」ということばです。神はヨブを喜んでおられたのです。なぜなら、彼が完全な非難されるところのない道を歩んでいたからです。

新約聖書の著者たちは、この「全き、非難される所のない」ということを、ヘブライ語をギリシャ語に訳したそのギリシャ語のことばを使って、非常に大切な事柄を私たちに教えます。神が私たちを救ってくださった目的がまさにここにあると言います。例えば、パウロはエペソ人への手紙 1 : 4 で「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」と言いました。ここには救いの目的が記されているのです。神がなぜ私たちを世界の基が置かれる前から私たちを選んで救いへと定められたのか、その理由は、私たちが神の前に完全な者になるためです。同じ、エペソ 5 : 27 ではパウロはこのように言います。「ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」と。パウロがここで言っていることは、キリストがなぜ教会を愛しご自身をささげられたのかということです。「しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないもの」となって、「栄光の教会をご自分の前に立たせるため」だと言います。

コロサイ 1 : 22 でパウロはこのように告げます。「今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。」と同じことを言っています。なぜ、私たちは救われたのでしょうか？なぜ、私たちは神によって選ばれたのでしょうか？その目的はここにあるのです。私たちが完全な傷のない生き方をするためです。そのような人物へと行って行くためです。だから、傷のない全き道を行く人たちは神から「幸いな人」と呼ばれるのです。なぜなら、その人は神の目的を果たして生きているからです。その人は神のみこころに沿って生きようとしているからです。神が与えようとしてくださっているそのすばらしい最善の事柄を、全うして生きて行こうとしているからです。

また、詩篇にも同じことばが使われているところがあります。詩篇 18 : 30 「神、その道は完全。主のみことばは純粹。主はすべて彼に身を避ける者の盾。」、19 : 7 「主のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、主のあかしは確かで、わきまえのない者を賢くする。」、「完全」ということばがそうです。これが第一番目のこの人の特徴です。「幸いな人」とは、人々から「何と羨ましい」と言われるような人、神が「あなたは何と幸いです！」と言われる人は、全き道を進もうとしている人です。

(2) 主のみおしえによって継続的に歩み続ける人 1 b 節

また、「歩む人」の特徴は継続性です。この「歩む」ということばは、神が定めている全き道をまさに進んで行くその姿を現わしています。実際に、一步一步足を進めて行くことを現わしています。そして、ここで使われている文法的な概念を見た時に、著者はここで「幸いだ」と言われている人たちが、自分のライフスタイルとして、生涯を歩んで行くその習慣として、神さまの教えによって一步一步足を前に進めていることを見ることが出来ます。そのことが強調されています。変わることなく継続的に、自分の習慣としてそのように生きて行く人です。

先ほど、八つの神のみことばに関する基本的なことばが使われていると話しました。その一番目のこと

ばがこの「**みおしえ**」ということばです。このことばは詩篇の中に全部で25回登場するのですが、このことばがもっている元々の意味は「指し示す、教える」という意味です。その動詞から派生したことばです。つまり、著者がここでこのことを強調しているとするならば、このことばを使うことによって私たちが理解できることは、この人は神が指し示していることによって、毎日の歩みを継続して行ない続けている、生き続けているということです。神が教えてくださっていること、神が示して「わたしがあなに進んで欲しい道はここです。」と言われているその道を歩き続ける人です。それが、ここで著者が私たちに言っている「幸いなる人」の第二番目の特徴なのです。

皆さん、私たちの生き方は必ずしもこのようではありません。私たちはみな不完全です。「全き道に行く者は幸いだ。」と言われると、残念ながら、「私は幸いではない」と思いませんか？継続的に、習慣的に、いつも神が示してくださっているその道をしっかりと歩み続けることが出来る人が幸いだと言われたら、「すみません、私は余り幸いではないです」と言わなければいけないかも知れません。でも、皆さんよく覚えておいてください。この詩篇の著者が言わんとしていることは、私たちが完全だから幸いだということではありません。著者も自分たちがいかに罪深いかはよく分かっているのです。詩篇の中を見ると、「いったい、どうすれば私は自分の道を守ることができるのでしょうか？」と言っています。外れることを知っているからです。「いったい、どうすれば罪を犯さずにあなたの前に聖い人生を歩むことができるのでしょうか？」とこの人物は訴えかけるのです。なぜなら、彼は常に全き道を進んでいないことを知っているからです。でも、確かに、私たちが人生の詳細に焦点を当てて、自分たちの生きている人生の長い道のりのその一部分ずつを拡大してみるなら、私たちが生きている道は神が示している正しい道から逸れているかも知れません。そのようなときがあります。でも、拡大しているその目線を上から見てずーと引いてください。そして、一点を見つめるのではなく、人生を一つのラインとして見る事ができるまで下がってください。そうしたときに、「幸いな人物」が歩んでいる道はどのように見えると思いますか？

主が示してくださっている、傷のない、神の指し示す教えに沿った道を歩んでいるように見えるのです。確かに、一点一点に小さく焦点を当ててそれを拡大して見るなら、グニャグニャしているかも知れません。でも、その人の特徴、その人の生きている生き方を見た時に、その人の人生を遠くから、全体をながめた時に、そこに見ることができるのは、神の道に沿って真っ直ぐに歩んでいる姿です。それが「幸いな人」だと言うのです。「幸いな人」は神が示してくださっている道に時々居るのではありません。居たことがある人でもありません。偶然通りかかった訳でもないのです。その人はその道を歩み続ける人なのです。

(3) 従順である 2節

2節の初めに「幸いなことよ。主のさとしを守り、」とあります。三番目の特徴は、この人は「従順である」ということです。皆さん、1節で比喩的に表現されていたことが、2節で具体的になるのです。「全き道に行く、主のおしえによって歩む」と比喩的に表現していることを、この著者はそれらを具体的に明確にしてくれるのです。それは「守る」ことです。ここでもその継続性が文法的に表わされています。「守り続ける」、従順であり続けるのです。そのように従順に歩む者だけが、神だけが与えることができるすばらしい祝福に満ちた人生を生きることが出来ると著者は教えるのです。

みことばに対する二番目に大切なことばがここで記されています。それは主の「**さとし**」です。この「さとし」ということばは「証」と訳すことができます。神のことばは、神の性質、神の属性、神の基準、神のみこころ、そのような事柄に関して「これがそうです！」と私たちに証してくれるのです。また同時に、私たちがこのみことばから離れて神の性質に沿わないで、神のみこころから逸れて生きて行くと、そのことを私たちに証してくれます。「あなたは逸れていますよ。」と。その逆も同じです。それに正しく生きて行くと、このみことばは私たちに「あなたは神の道を確かに歩んでいます。」とその証をしてくれるのです。

これら三つの表現は、最終的には私たちを一つの結論に到達させます。それは「神のみことばによって生きる者だけが、真の幸福、決して揺らぐことのない喜び、完全な満足を経験する」ということです。神のみことばによって歩む者だけがそれを得るのです。なぜでしょう？不思議だと思いませんか？なぜ、このみことばがそのようなことをさせるのでしょうか？なぜ、みことばに沿って歩むなら、私たちはそのような生き方ができるのでしょうか？幾つか答えがありますが、その一つ一つを見て行くと、それだけで一つのメッセージになります。でも、リストがあります。

◎なぜ、私たちはみことばに沿って歩むとき幸せになれるのでしょうか？

a. 私たちのうちから罪を取り除くから

私たちの心から喜びや満足や幸福を奪い取るのは何ですか？罪です。その罪を私たちの心のうちから

取り除くことが出来る唯一のものは何ですか？神の生けるみことばだけです。両刃の剣よりも鋭いこのみことばは、私たちの心の中にある悪しきものを明確にし、それを取り除くことができるのです。だから、みことばによって歩む者は罪が取り除かれ、神が与えてくださる喜びと満足をもって、幸いな生涯を生きて行くことができるのです。それだけではありません。

b. このみことばだけが、私たち人間を完全に満足させることが出来る神の栄光を示してくれるから

このみことばだけが、神がどのような方なのかを具体的に示してくれるではないですか！このみことばだけが、神のすばらしさを私たちに教えてくれるではないですか！そのことが分かった私たちは、神の栄光によって満たされた人生を歩んで行くことが出来るのです。

c. 私たちをキリストに似た者に変えるから

このみことばだけが、私たちを神に近づけ、喜びをもたらす唯一真の根源であるイエス・キリストに似た者に変えてくれるのです。それが出来るのはこのみことばだけです。このみことばだけが、私たちがキリストに似た者へと変えるために必要なものであって、このみことばだけが、私たちにそれをなさせるのです。

d. 真の満足と永遠の希望を与えるから

このみことばだけが、私たちに揺らぐことのない真の希望を与えます。神のことばは真実です。神の約束は必ず成就されるのです。それゆえに、私たちはこのみことばを通してその約束を学び、それに信頼を置いて生きるときに、私たちは絶望を経験しないのです。神は最後に「勝つ」と言われます。最終的に、神は私たちに幸いを与えと言われます。だから、どんな状況にあっても私たちはその喜びに満たされて生きることが出来るし、どんな時にも来るべき神の約束に目を向けて、喜びをもって生き続けることができるのです。

だから、このみことばによって歩む者は幸いなのです。傷のない道を、継続的に、神のみことばを守りつつ生きて行くその人物は幸いなのです。

2) 幸いな人とは？ — その行動 2b-3節

特徴だけではありません。この著者は私たちにその人たちがどのような行動を取るのかを教えています。そのことが2節の後半から3節にかけて記されています。

(1) 心から主を求める 2b節

最初に行動として見る事が出来るものは、具体的な行動を付き動かすもの、それをさせる動機と言って良いかもしれません。それが2節の後半部分に「心を尽くして主を尋ね求める人々」とあります。この人物が取って行く行動、それは心を尽くした全身全霊の生き方です。全身全霊、神を求めて生きていく生き方、それが幸いな人物の行動を支配しているのです。2節のこの部分で敢えて区分したのは、原文ではここから新しい文章が始まるからです。実際には、2節の後半部分も幸いな人物がどのような人なのかを言い表わしています。それゆえに、「特徴」としても良いかも知れませんが、私はここに、この後3節に出て来る具体的な行動の動機を見るのです。なぜ、この人物は神の前にこのような生き方をして行こうと思うのでしょうか？このような生き方をするその原動力は何なのか？それがこの2節の後半部分です。この人は「心を尽くして主を尋ね求める」のです。ここで言わんとしているこのことばは、全身全霊をかけて神を求めて行くことです。「完全な献身」です。

皆さん、その献身はどこに向かっていますか？神のことばではないのです。興味深いと思われませんか？彼が心から願い求めていること、慕い求めていること、それは神のことばではないのです。幸いでもないのです。神ご自身です。「私は神ご自身を心から慕い求める」とそのように言っている人物が幸いだと言うのです。生まれながらの人間はだれでも幸福を求めて生きます。皆さんもその通りでしょう。でも、残念なことに、私たちは幸せになることを目的として幸福を追究します。「幸せにさえなれるなら！」と、それが終着地点なのです。そのように私たちが幸福を求めて行くなら、私たちは虚しさしか感じません。なぜですか？確かに、瞬間的な幸福は感じます。欲しかったものを手に入れて「ああ嬉しい！」とか、何か良いことがあって「ああ良かった！」と喜び満足した…。確かに、そのような一瞬一瞬を味わうことはできますが、その直後には私たちはさらなる幸福を求めようとしませんか？瞬間的な幸福を味わうゆえに、私たちはもっと幸福になりたいと思うのです。そして、その追究はいつまで経っても終わることがないと皆さんお気づきになりませんか？すばらしいものを手に入れた、「ああ、何と嬉しいことだろう！」と思った次の日には、別のものが欲しくなる…。何と虚しいのでしょうか。

でも、この詩篇の著者は幸せな人はそのような人物ではないと言うのです。幸せを求める人ではないのです。また、神のみことばを求めるだけではないのです。知識を蓄えることがすばらしいと考える人たちはたくさんいます。学術的に聖書に向かう人たちもたくさんいます。けれども、そこにも幸いはないと言います。この著者が言うことは、あなたがみことばを学ぶなら、あなたは神を慕い求めなければ

いけないということです。神を知るためにこのみことばを見なければいけないと。神のみことばを知ること、聖書のことばを理解したいからではないのです。神のみことばを学び、研究し、それをしっかりと理解しようと思うのは、このみことばを与えた神を知りたいからです。神のみことばを求めるのは、「みことばの神」を求めるからです。

私たちは多くのときにそのことを学んで来たので繰り返す必要はないと思いますが、申命記6：4－6を見ると、もし、私たちが心を尽くして神を愛するならば、私たちは神のことばを心に刻まなければいけないのです。「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。：5 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。：6 私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。」、それゆえに、「私はクリスチャンです」と名乗る人たちから「聖書の学びはつまらない。」ということばを聞くと驚いてしまいます。「聖書を学ぶことはつまらない。そんな無益なことではない。難しすぎて分かりません。私はもう諦めました。」と、驚いてしまいます。もし、この聖書に皆さんが心を尽くして愛する方について記してあるとするなら、この方を表わしているとするなら、皆さんは熱心になると思いませんか？もし、この聖書が、皆さんがだれよりも愛する人についての情報を与えてくれるとするならば、皆さんはそれを楽しんで読むと思いませんか？もし、ここに記されていることが、皆さんが心から愛して止まないことなら、いったい、どうしてこのみことばについて情熱的に熱心に話さずにいられるのですか？

このように、心を尽くして神を追い求める人物はどのような生き方をするのでしょうか？そのことが3節に記されています。肯定的と否定的に記されています。

(2) 不正を行なわない 3 a 節

3節の最初の部分には否定的なことばが使われます。「まことに、彼らは不正を行なわず、」、悪を行なわない、自ら進んで神の前に正しくないことを選択しないと言うのです。

(3) 主の道を歩む

そして、肯定的にこの人物は「主の道を歩む」と言います。具体的に、毎日の生活にあって「どこを歩んでいるのですか？」と問うと、「神が私に示してくださった道を私は歩みます。」と答えます。なぜなら、この人は悪を選択しないからです。正しいことを選択するからです。なぜ、そのような歩みをするのでしょうか？その根源にあるのは「私は神を慕い求めているから」です。神のところに行きたいから、そのためには神に向かっている道を進まなければいけないからです。それが真の神の民の生き方、それが幸福を得ている人の生涯の歩みだと言うのです。

使徒ヨハネはこのことについて、皆さんがよくご存じの箇所ですが、このように言っています。Iヨハネ1：6「もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。」、神と交わりのある人は「神の道」を歩み、「やみに中」を歩みません。2：6では「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。」、3：6「だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちに歩みません。罪のうちに歩む者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。」、神の民、神から「幸いだ」と言われる人は完全な人物ではありません。唯一完全な人はイエスだけです。イエスにお会いして、私たちの姿が完全にイエスに似た者に変えられるそのときまで、私たちは100%常に神の道の中に留まり続け、神が示してくださっている事柄を行ない続けることはできないでしょう。でも、どのような生き方をしているかが問題なのです。人生をすべて見ることができるほど、遠くから私たちの生涯を見た時に、それが神に向かって真っ直ぐに伸びる道になっているかどうかです。

皆さん、どんな生き方をされますか？皆さん、みことばを知っていますか？みことばを知って、みことばに記されていることをもって皆さんは生きていますか？この詩篇の著者は言います。「幸福の秘訣はここにあります。」と。神のみことばに沿って生きるときに、いや、神を心から慕い求めるゆえに、神が教えてくださっていることに目を向け、それを理解し、それを実践して歩んで行く者にのみ、真の喜び、完全な満足、幸福があると言います。それに留まり、その道を歩むときに、私たちは神から「あなたは幸福です。」と言われるのです。私たちの金銭、財産、成功、人間関係、様々な状況、あらゆるものは、私たちに幸福を与えることはできません。神だけがそれを私たちに備えることができるのです。そして、その方法はこの「みことばに沿って歩むこと」です。

2010年5月22日、ほんの数ヶ月前のことです。13歳の少年がエベレストの頂上に立ちました。カリフォルニア出身のこの少年は幼い頃から登山を続け、ついに13歳にしてエベレストの頂上に立ったのです。最年少記録を3歳上回りました。想像出来ますか？13歳の自分がエベレストの頂上に立っている姿を…。2008年5月25日には、76歳のネパール人がエベレストの山頂に立ちました。最

年長記録を5歳更新しました。皆さん想像出来ますか？76歳の自分がエベレストの山頂に立っている姿を…。なぜ、このようなことができるのでしょうか？この人たちが特別だったからでしょうか？

皆さん、ご存じですか？120歳だったモーセは、イスラエルの民の前に立って、みことばに従って行くことが何よりも大切だと切々と訴えました。死が近づいたときヨシュアは「私と私の家とは、主に仕える。」と言いました。84歳だったアンナは、神の約束に信頼を置いて、神殿で救い主が現われることを待ち続けました。少年だったダビデは、他のすべての人が恐れて立ち向かうことが出来なかった巨人ゴリアテに、神はみことば通りに約束を果たす方だからと言って立ち向かいました。まだ、10代前半だった幼かったマリヤは、懐妊したという知らせを聞いて、神のことばに信頼をおいて自分の身を神の約束に委ねました。まだ、10代だったダニエルは、補囚でバビロンに連れて行かれて様々な困難の中を歩いていく中で、彼は幼くして常に、神のことばに逆らうことほど悪いことはないとしっかり理解して、神の前に忠実に生きる歩みを始めました。そのダニエルは老人になってもその姿勢を変えることなく、どんな迫害の中にあっても、神のみことばの通りに生きようと生き続けたのです。

彼らが特別だったからでしょうか？彼らがすばらしいのでしょうか？彼らだけが特別な祝福を受けたからそのようになれたのでしょうか？違いますね！特別だったのは彼らではないのです。特別なのはこの「みことば」なのです。特別なのは彼らではありません。特別なのは神です。その神が語ってくださったみことばを通して、私たちは教えられ、変えられ、彼らが生きたような人生を私たちも歩むことが出来るのです。たとえ、若くても、たとえ、齢を取っていても…。

皆さんは今幸せですか？皆さんは今、満足していますか？皆さんは絶えることのない心からの喜びに溢れて毎日生活しておられますか？皆さん、出来るのです！なぜなら、神はそのために私たちにこのみことばを与えてくださったからです。